

武蔵野日曜集会

アナテマ

――ロマ書第9章1～5節――

1978年8月20日(武蔵野)

小池辰雄

根源現実¹はキリストに在ること 大なる憂と絶えざる痛 言葉は暗号 キリストの愛が動かし
ている 献げものと呪いもの アナテマ魂

【ロマ9:1～5】

1 我キリストに在りて真^{まこと}をいい虚偽^{いつわり}を言わず、² 我に大なる憂^{うれい}あることと
心に絶えざる痛^{いたみ}あることを我が良心も聖霊によりて証す。³ もし我が兄弟
わが骨肉の為にならんには、我みずから詛^{のろ}われてキリストに棄てらるるも亦
ねがう所なり。⁴ 彼等はイスラエル人にして、彼らには神の子とせられたる
こと、栄光と、もろもろの契約と、授けられたる律法と、礼拝と、もろもろ
の約束とあり。⁵ 先祖たちも彼等のものなり、肉によれば、キリストも彼等
より出で給いたり。キリストは万物の上にあり、永遠に讃むべき神なり、ア
アメン。

●根源現実¹はキリストに在ること

1 我キリストに在りて真^{まこと}をいい虚偽^{いつわり}を言わず、

これは非常にハッキリしたパウロの宣言です。「我は真実を言う」とは、「キリストに在りて」と彼は言いました。彼が「キリストに在って」と言うときには、形容詞で言っているのではない。いわゆる信仰的な表現ではない。正に彼の存在そのものの一番は、

「私は何かと言うと、キリストに在る者だ」

とパウロは言う。「我思うゆえに我在り」なんていうのではなくて、ちゃんと

「エン・クリスト」

と書いてあるんだ、

「真^{まこと}を我言う、キリストに在って」

「アレテイアン レゴ― エン クリストー」

と。彼の真^{まこと}は、「ア―メン」とか「アレテイア」は、「キリストに在る」ということだけが彼における本当の現実なんです。

「わが根源現実¹はキリストに在ることなり」



という。ギリシア語は知らなくていいよ。ただ「エン・クリスト」だけは覚えておいください。

「クリストの中に」

と。「クリストに在りて」「エン・クリスト」というクリスチャンが今どれだけいるんでしょうかね。形容詞でものを言っている。観念で言っている。「クリストに在るためには、こちらの聖書知識が、毎日の実存がちゃんとしてなくては」なんていうことを考えていたら、いつまでたつても「クリストに在る」ということは言えない。「クリストに在る」という者は本当に自分を問題にしない者だ。自分なんてものは問題でないやつ。それが私の言っている「無」なんです。「無」という言葉は非常に誤解されて困る。無私です。非常にムシのいい話なんです。

虫といえば、私は昨日テレビを見ていて驚いた。あの小さな子蜘蛛くもがたくさん袋から出てくる。蜘蛛が尻から糸を出して、風にスーッとなびかせて、風の勢いで飛んでいく。私はあの光景を見て、自然というものはさすがに大したものだな、神さまの造化の妙というものは大変なものだなと思って、私は酔うようにして、糸でスーッと飛んでいく子蜘蛛の姿を見ていた。

聖霊の風によって我々はあの子蜘蛛のように本当に動いているか。祈りの糸を出して、聖霊の風で自由自在に動いているような、そんなクリスチャンが幾人いるかと。子蜘蛛にかなわないんだ。私は子蜘蛛を見て、そういうことにハタと気がついた。

「オール アイズ、オール イヤーズ」というけれども、活眼活耳をもつてものを見、またものを聴けと。神の真理はそこらにこぼれているではないか。何見ているんだと。「お前は何を見るか」「子蜘蛛の糸を見る」なんてなわけだ。子蜘蛛の糸において何を見るか。その答えは、御霊の風によって祈りの糸でもって飛ぶクリスチャンであること。

誰もそんなことを思ったことはないだろう。あなた方はテレビを見て、何見ているんですか。近頃、自然界のいろんなのを映しているのがあるけれども、時々、ことに一番うたれるのは小さなものの存在です。小さいものの存在の中に非常な真理が隠されている。ライオンだの、ゾウだのはダメだよ。ヒルティも言ってたけれども、

「小さいものをよく見ろ」

と。人間の中だつてそうじゃないですか。

「おさなご幼児の中に神の国が宿っている」

と、キリストは見たじゃないですか。

「**幼児の如くならずば天国に入れない**」

と言われたじゃないですか。人間はだんだんバカになってしまふ。

「**我**キリストに在りて**真**をいい**虚偽**を言わず、

「まこと真を我は言う、キリストに在つて。いつわり嘘じゃないよ」



と。本当のことをキリストに在って言う。パウロの言葉はもの凄いドラマチックな構造を持っている。大体、7章、8章がそうでしょ。9章の始めの言葉がまた、8章に対して非常にドラマチックな反語的な言葉です。彼の言葉を読んでいると、もう何かもの言うのがいやになってしまう。

●大なる憂と絶えざる痛

2 我に大なる憂^{うれい}あることと心に絶えざる痛^{いたみ}あることを我が良心も聖霊によりて証^{あかし}す。

第2節は、その「真^{まこと}を言う」というのがキリストに在ってどんな真かというところだと。「大なる憂」というのは、「私にとって憂いが大きい」と書いてある。また、「絶えざる痛みが私の心の中に」と。そういう、大いなる憂いと――憂いが大きいということ――絶えざる痛みが自分の中にあると。憂いと痛みという内容は、パウロはいろいろなものをその中に持っていたと思う。

皆さんも、個人的にそれぞれあると思う。今度の集会に家の反対を押し切つて来ようとする乙女がいるが、これは戦わなければダメだよ。信仰の自由は、なにも憲法に保障されているばかりでない。神さまに保障されていることだ。その痛みと戦いがある。

私は伝道らしい伝道を別にしたわけではないけれども、とにかく一応37、38年ここで話してきた。まあ入り代わり立ち代わりいろんな人が出たり入ったり。私にほとんど反逆的に出ていった人もあるし、いろいろです。けれども、私はひとつも恨んでいない。時々、祈る。さつき歌った讚美歌集の中にもちゃんとその人の名前まで出ている。私はその余白に書いてあるんだ、時々いろんなことを。消そうとは思わない。すべて気の毒なんです。私はどう思われた方がいいよ。けれども、その人が本当にキリストに在って今生きているか。

「小池先生というのは先生らしくないようなやつだったけれども、しかし、あの先生が本当に目指したところの福音は、あれは本ものだった」

と言うならいい。私はどうせ「罪びとの首^{かしら}」みたいな野郎だから。

「伝道することが、その人の実存がみんなの模範になるようであれ」

というなら、私はもう今日即刻、伝道をやめるよ。私は模範じゃないもの。落第生だ。けれども、

「そういうやつだからこそ、私はお前を救った。そういうやつを通して天国をつくっていく」

という、キリストの絶対恩寵のことになったら、私は一步も退かない。そういうわけです。パウロもそうです。今までパウロはキリストを迫害していた。彼はキリストを、キリストとクリスチャンを呪っていたんだ。ところが、キリストにやつつけられた。そして、今までパリサイの親玉だったのが、今度はキリストの僕となって、彼は一生懸命で本当に、「パ



リサイはいかん」と言つて、自分の過去に対する徹底的な批判をしている。

●言葉は暗号

「私は自分自身が大間違いをしていたが、ユダヤ人の間違いをどうか赦してもらいたい。私はたとえキリストに捨てられてもいい」

と言っているでしょ。

もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから^{のろ}まれてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。

と。兄弟骨肉と一緒に自分はキリストを呪っていたが、キリストにこのように救われたら、彼らを本当に救うためにはキリストに捨てられてもいいんだと。もう極限的な言葉です。8章の終りでは凱歌を上げているでしょ。

「誰が私をこのキリストの愛から離すことができるか」

と言つて凱歌を上げているパウロが、

「たとえキリストに捨てられても」

と言うから。熱烈な兄弟愛が、自分を捨ててかかる兄弟愛がなければ、これは言えない。

「これが愛国心の極致だ」

と、内村先生も言っているとおり、愛同胞心の極致である。直接に愛しているのではない。本当に福音の場からの愛です。肉的な意味で、相対的な政治的な社会的な意味で愛しているのではない。神さまのものにならなければ、全てのものはダメだ。キリストのものであれば、全てはダメだということです。私が、

「南無キリスト」

なんて言うものだから、ある人から

「これは絶対反対だ。仏教の南無なんていう言葉を使って、福音をおかしなことにする」

なんて言ってきた。何教だっていいよ。言葉は言葉で、真理を表わしている言葉なら、何を使ったっていい。私はそういう、仏教とキリスト教とをこっちゃにしているのではない。福音がもの凄いいから、一切の善きものは――パウロは

「およそ善きものは尊べ」

と言つた――それを使っている。使うというと、もうその内容は、そこで使われている言葉以上の内容を持っている。哲学者だってそうですよ。同じ言葉を使つても、この哲学者はこういう意味で使っているし、別の哲学者は別な意味で使っている。また、その時代的背景でもって意味が変わってくる。いわんや、福音の中に入ってくれば、ヨハネが、

「はじめにロゴスあり」

と言つたあの「ロゴス」は、ギリシア哲学のアレクサンドリア派の「ロゴス」と、ヨハネ



が使っている「ロゴス」は同じ言葉でも内容が違う。ヨハネの「ロゴス」はキリストだもの。同じ「光」と言ったって、方々に「光」があるよ。「お光さん」なんていう宗教もある。では、キリストはお光さんか。全くお光さんだよ、これ。

「我は世の光なり」

と。言葉は同じじゃないですか。どうしてくれるんですか。言葉は暗号だもの。その言葉がここにおいてはどういう意味を持っているか、どういう内容を持っているかで違うだけの話です。そこを間違えて、「南無」と言ったら、もうそれで仏教化したかなんて冗談言うなど。

それはね、まだ信仰の多少弱い方にいきなりそんなことを言っては蹟く。私だって普段ここでもって、「南無キリスト」なんてあまり祈りはしないよな。心の中では「南無キリスト」だけれども。しょっちゅうそれを使って、皆さんに「南無キリスト」なんて言ってもらおうなんて思ってるやしない。ただ、この「南無」という言葉は素晴らしい――帰入、祈入――帰入する、祈り入るという意味を持っているから、それで掲げてじつと見てれば、その世界に入るだけの話だ。

●キリストの愛が動かしている

2 我に大なる憂あることと心に絶えざる痛あることを我が良心も聖霊によりて証す。
あかし

「大なる憂あることと心に絶えざる痛あること」という。皆さんも、それぞれこの福音の中にあって、それを持っている。

今朝もテレビで国防のことをやってた。大いなる国家的な憂いがある。憲法をどうしようかと。恐いのはロシアでも何でもない――ロシアじゃなかった、ソ連か。私は明治の人間だから、ロシアだのシナだのと言う。ソ連だの中国なんていう言い方はあまりピンと来ないんだね――ロシアでもシナでもアメリカでもドイツでもないんです。日本でもない。心配なのは、大いなる憂いと痛みは我々の心の世界です。魂の世界です。

パウロはそのことを言っている。ユダヤ人のこの魂を、本当にキリストに在るといふところに持っていきたいと。そうしたら、今まで大問題と置いていたものが自然に解けてしまう。太陽の光がくれば、冰山も融けてしまう。この冰山をどうしてくれようかとしたって、どうにもならん。太陽の光がくれば融けてしまう。光熱でもって融けてしまう。

そういうように福音というのは本当に融かしてしまう。融合してしまう。イデオロギーを超えた世界ですから。イデオロギーではどうにもならん。イデオロギーには限界がある。それは本当にもう分かりきったことなんだけれども。まあ人間というものは救いがたいもんだよ。だからパウロは、

「私はキリストにこんなに救われたけれども、たとえキリストに呪われても、私は



地獄に落っこちても、彼らは天国にやりたい」

と言う。これは本当のアガペーの愛です。己を捨てている愛です。私無き愛、無私の愛です。

「私のものではありませんよ、この愛はキリストのものです」

とパウロは言っている。「キリストに捨てられても」と言っている言葉の奥には、キリストの愛が実は動かして、そう言わせている。捨てられたと思ったら、どっこいこれはキリストの中なんだ。

「そういう人間は始末におけない」

と西郷南洲も言ったじゃないですか。そういう始末におけないような人にならなくちゃ。私は内村鑑三、藤井武の先生方には敬意を表するけれども――それは先生方は真剣に戦ったから――聖霊のことになると、まだ惜しかったなあと思うだけです。もちろん先生方に聖霊が来てなかったとは言いません。けれども、パウロのようなところは惜しかったなあ。それは内村先生は火花しているから、力を持っています。内村先生という人間はもうそういうように造られているんだから。とにかく、内村鑑三、藤井武の50周年のときを私は本当に待っている。ただ50年を待っているのではない。狼煙^{のろし}を上げるために待っている。

● 献げものと呪いもの

³ もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから呪^{のろ}われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。

パウロは「呪われても」と言う。この「呪われる」というのが

「アナテマ」

という字なんです。

「自分はキリストから呪われた者となっても、それは私の兄弟と親しき者たちのために」

と。「アナテマ」という字はヘブライ語では「ヘッセム」という字で、もともと「断ち切られるもの、捨てられるべきもの、忌み嫌われるべきもの」という意味を持っているが、これはまた面白い言葉です。特別にとつておいてそれを神に捧げる「献げられたるもの」という意味もある。だから、非常に聖なる意味と呪われた意味と両方持っている。妙な字だ。「献げもの」という意味と「呪いもの、忌み嫌われるもの」という意味と全然正反対の意味を持っている。申命記7章26節に、

「²⁶憎むべき物を汝の家に携えいるべからず。恐らくは汝も呪^{のろ}わるる者とならん。汝これを大いに忌み痛く嫌うべし。是は呪^{のろ}うべき者なればなり。」(申命記

7・26)

とある。この「呪^{のろ}わるる者」「呪^{のろ}うべき者」が「ヘッセム」です。「忌む」とか「嫌う」とか「呪う」とか、みんなこれは連関した言葉です。その前には偶像のことが書いてある。



それから、ヨシユア記6章17節に、

「¹⁷この邑^{まち}およびその中の一切の物をば^{のろ}呪われしものとしてエホバに献ぐべし。ただ妓婦^{あそびめ}ラハブおよび凡て彼とともに家に在るものは生かし^{おく}存べし。われらが遣わしし使者を^{かく}匿したればなり」(ヨシユア記6・17)

と。例の七日間エリコの町を回ってどうのこうのというところす。

「^{のろ}呪われしものとしてエホバに献ぐべし」

という妙なことが書いてある。大体、呪われし者としてエホバに献げられた者は誰ですか。キリストじゃないですか。キリストの十字架は呪いの最大の表現なんです。「呪いの木にかかって」と讚美歌にもある。ペテロも書簡の中でもそのことを言っている。キリスト自身が、「わが神、わが神、なんぞ我を捨て給いし」と言って叫んだほどに、みんなにキリストは呪われた。忌み嫌われた。十字架につけられた。犠牲にされたわけです、「献げる」というのは。

ところが、どうですか。ヘブル書に何と書いてあるか。今度は、十字架のことを「至聖所」と書いてある。全然別なことだ。ヘブル書9章12節、

「¹²山羊と^{こひし}犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の^{あがない}贖罪を終えたまえり。」(ヘブル9・12)

と。この「至聖所」は十字架です。妙な言葉ですよ、「ヘッセム」という字は。パウロは、

「キリストに呪われても」

と言った。キリストは、

「神さまに呪われても、みんなに捨てられても、私は十字架でもって人を救う。人の救いのためには私は私は呪いの木にかかります」

「お前は呪いの木にかかれよ。アナテマであれよ」

と。「殉道者となれ」と言うことと同じことだ、「アナテマ」というのは。道に殉ぜよと。

「ああ、エルサレムよ、エルサレムよ」

と言つてキリストは嘆いた。これが大いなる憂いです。大いなる悲しみです。

私はたくさんの先輩や先生にも友人にも捨てられた。「小池は無教会の信仰からズレた」と言われて、アウトサイダーにされた。アナテマにされた。けれども、本当の友だちを得た。

「^{あだ}仇を返すは我にあり」

という。神さまの仇は人を救うことなんです。キリストの仇は人を救う。相手を救う仇の返し方なんです。これが「デバイン・リベンジ」「神聖なる報復」という。キリストの十字架は、私たちがキリストを十字架にかけながら、キリストは私たちを救い給う。これが「デバイン・リベンジ」、神聖なる復讐です。罪に代えるに義をもつてした。憎しみに代えるに愛をもつてした。捨てることに代えるに相手を担い上げた。神の国はそのような人たちによって造られていくのです。



●アナテマ魂

4 彼等はイスラエル人にして、彼らには神の子とせられたること、栄光と、
もろもろの契約と、授けられたる律法と、礼拝と、もろもろの約束とあり。⁵
先祖たちも彼等のものなり、肉によれば、キリストも彼等より出で給いたり。

そんなに神さまから畳みかけて歴史的に恩恵が来ているのに、なんだと。キリストもその中から出たではないか。それなのに私もそのことを知らなかったけれども、それを本当にただ伝統として受け継ぐのではなくて、霊的に受け継ぐところの、その質的な変化をその内容としてもたらすような、そういったものになんか変わってくれ。そのためには俺は捨てられてもいいんだと。そして、

キリストは万物の上にあり、永遠に讃むべき神なり、アアメン。

と言った。パウロはハッキリ、「キリストは神なり」と言いました、ここで。

マルチン・ルターは、「エホバ」というのはみんな「キリスト」として読んでいた。ルターは始めから終りまでキリストなんだ。本当にルターもキリストに酔っていた男だね。私の今度の『ルター伝』の中に書いてある。何と言おうが、御霊のキリストを抜かして、私は在りませんよ。皆さんもそうでしょ。全身にキリストの霊が、その力が溢れてくれば、腎臓結石なんか溶かしてしまう。癩病人を癒し死人をも甦らせたキリストです。さっきの讃美歌にも、

「罪に死んだ私を生かした」

と書いてあったでしょ。あの502番はいい讃美歌だよ。私は讃美歌を歌いながらも、グツとその中をつかみながら歌いまた聞いているんです。

もったいないね、こんな福音をあなた方少数の人たちが聞いているだけで。本当に伝えてくださいよ。もう時は迫ったです、私自身が。

パウロの言葉は論理的構造ではない。ドラマチックな構造です。「捨てられても」と言つて今度は、

「キリストさま、あなたは神さまです。アーメン」

と言つて、彼は凱歌を上げている。パウロは、

「ユダヤ人のためには、同胞のためには私は捨てられていい」

と言つた。キリストは、

「人類のために捨てられていい」

と言つた。我々も、

「呪われ、アナテマでよろしい。アナテマ精神でなければ本当は人を助けることができない」

と言つて、アナテマ魂となつて行きます。

